《書　評》

村上　處直（すみなお）著

都市防災計画論

同文書院　昭和61年12月　200ページ　定価5,000円

昭和61年9月，本誌で特集「災害のOR」を組んだ折，村上處直氏には地震災害について御寄稿いただいた．村上氏は工学部建築学科の出身で，昭和37年防災の研究を始められたが「技術者として防災をやるのでなく，計画者として防災研究」を一貫して行なってこられた．「災害という現象は人間がまき込まれるからこそ災害なのであって，きわめて人間的現象であるにもかかわらず，人間の問題を入れた災害研究がほとんどなく，物をつくるための技術的防災研究のみが進展していた時に，計画者として防災をやることとなったわけである」とOR誌の中でも述べられているように，計画者の立場から過去の地震災害に焦点をあてて解説していただいたので，読者諸氏の印象に残っておられよう．

村上氏は今回頭書のごとく「都市防災計画論」を発行された．—時・空概念からみた都市論—のサブタイトルが氏の主張をよく現わしている．昭和47年5月13日の千日デパート火災をはじめ数多くの災害現場を詳しく検証し，災害時における人間の行動と時間・空間の関係を解析し，その教訓を白鬚東地区防災再開発事業，新宿副都心野村ビル，筑波跡地・杉並区蚕糸試験地跡地等々，都市防災計画にどう生かしてきたか，村上氏の永年の研究の積み重ねが豊富な資料とともに今回まとめて出版された．

本書は，Ⅰ都市防災の系譜，Ⅱ都市防災対策の諸例，Ⅲ都市防災計画序説の3部よりなりたっている．

第1部では，まず第1章で防災や災害で使われている用語の定義と解説，第2章で戦後の都市防災対策の動向が写真，図と年表をもって詳しく解説されており，特に添付資料の慶長以来の日本の歴史的災害事例と防災対策の系譜が興味深い．

第2部では，まず千日デパート火災について，アロー・ダイアグラムの手法を援用しつつ火災が時間の経過につれて建物空間にどう拡がり，その中で人間がどのように対応していったかが克明に解析されている．防災対策を念頭においた各局面に対するシナリオ・シミュレーション等々OR的発想は随所に生かされており，この分野でもOR技術がさらに援用されることが期待できよう．この作業から得られた数多くのノウハウが，超高層ビル防災計画に，また，さらに数多くの都市防災計画へどのように援用されていったかが実例をもって述べられている．

第3部では都市社会の拡大，変化とともに災害の質がどう変りつつあるか，地震災害に例をとり解析されているのが興味深い．また災害事例のデータ・バンク化についてその構想を述べておられるが，今後の展開を期待したい．

私事であるが，小生は昭和20年3月，東京下町大空襲の折，猛火の中を逃げまどった経験をもっている．その折の悲惨な光景は一生脳裏をはなれることはないであろうし，また生死紙一重の機転と行動で生きのびた友人も何人かおるので，きわめて身近なものとしてこの書を読み了えた．

防災計画の今後の進展とともに，この分野でORがさらに役立つことを期待するものである．社会人，研究者の区別なく一読をおすすめする．

（川野幸三郎　東燃石油化学㈱）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．